

火山瑠璃光寺経塚関連資料と糸島地域出土の経筒

河合 修（伊都国歴史博物館）

阿部洪太郎

I はじめに

平成21年1月、福岡県糸島郡志摩町大字稲留1055-1(現糸島市志摩稲留)に所在する、火山瑠璃光寺境内近くの山腹斜面において、青銅製経筒を含む経塚資料が不時発見された。

本稿は、糸島地域とりわけ旧志摩郡域において希少な経塚資料の出土例となった、この火山瑠璃光寺経塚の発見経緯と出土遺物を報告・紹介するものである。

また、瑠璃光寺経塚の発見以後、平成26年に二丈岳山腹にて陶製経筒が発見され経塚群の存在が新たに確認される(註1)など、近年、糸島地域における新出の経塚出土事例も知られるようになってきた。

本稿は、博物館企画展の展示準備等に伴い少しずつ蓄積してきた資料調査の成果として、現段階における糸島の経塚関連資料の出土事例を集成し報告を行うものである。(註2)

II 瑠璃光寺経塚について

(1)発見の経緯

平成21年1月、志摩稲留区のある人物から当時の志摩町教育委員会社会教育課に連絡が入った。

糸島市志摩稲留の火山瑠璃光寺境内にある山王社(小堂)をすぐ横の隣接地に新設移転する工事で、それに伴い現境内地の平地を地上げするため、境内脇の丘陵から土砂を採取しようと重機で掘削したところ、バケットに石が引っかかりその石(組)に囲われた中から、多量の炭化物と共に遺物が出土したという。

発見当初、掘削者らはこれらが埋蔵文化財であると認識せず、付近の土ごと斜面下へ落とし、また境内地へ遺物ごと土砂を散布させてしまったらしい。後日、土砂の中に遺物片らしきものが混じっていることに気付いた人物が、遺物数点を採集して、志摩町教育委員会へ届け出たのであった。

町教育委員会は採集品の中に経筒片や外容器と

みられる陶器片などが含まれていることを確認し、急遽、現地の確認に赴き、発見者らから聞き取りを行って、出土位置の特定と出土状況の検分を行った。

出土位置は、旧本堂(現在の薬師堂)から東に20m程の位置で、標高で約175mを測る地点にある。ここは、火山山頂部の尾根の最東部にあたり、尾根から南東向きの斜面に位置する。出土地付近には、現状ではあまり広い平坦面などは存在していない。

残念ながら、検分時にはすでに、経塚の発見場所付近に関連遺構の残存を確認することはできなかった。経塚の元位置付近は削平された後、さらに上部から落とされた土砂に埋没しているものと判断された。

発見者らからの聞き取りによると、経塚は石組みに囲われた中から、多量の墨と共に遺物が出土したという。現地では、確かに周辺に炭の付着した人頭～拳大の亜円礫が数点みとめられたことから、経塚の標石あるいは石組み遺構等が存在していた可能性は高いものとみられる。

採集された遺物の大部分は、掘削により細く破断されてその多くを欠失していた。その為、残りの資料を採集するため、境内地に散布された土砂に篩をかけるなどして、残存遺物の収集を試みたが、最終的に経筒などの全ての部位が完形に揃うことはなかった。

これら瑠璃光寺採集資料は、発見者である稲留区民及び境内地の管理団体である雷山大悲王院の意向により、現在、志摩歴史資料館に寄託されている。(註3)

(2)古記録類にみる火山瑠璃光寺

ここで、当資料の出土した瑠璃光寺に関する古記録類などから、その境内地と発見箇所の歴史的背景をまとめておきたい。

瑠璃光寺が境内を構える火山は、玄界灘に面した標高224mの低山である。「筑前国続風土記」



図1 火山瑠璃光寺経塚出土地の位置と出土地の現況写真

によると、火山(日山とも記す)の名は、神功皇后が山上で火を焚いたことからついたとされ、また、海上からの外敵侵入の際に大宰府へ急を告げる狼煙山であったという伝承などもある。この山が古来より山上で火を焚き夜間の海上交通の目印となっていたことなどに、その名は由来しているのであろう。

この火山の山腹に境内を構えた瑠璃光寺は、山号を不知火山といい、真言宗に属す。本尊に薬師如来を祀り、また眼病に効く名水を産することでも有名で、現在も小堂ながら靈験あらたかな古刹として多くの参拝者を集めている。

稲留地区の個人宅には、本寺開創時の顛末等を記した『瑠璃光寺略縁起』(卷子・成立年不詳)が伝存している。以下、現存する『瑠璃光寺略縁起』の全文の読み下し文を転載する。(註4)

「(前欠) …薬師如来なり、我を此山に安置すべし」との給(〔宣〕)ひて、消るが如くに失なふ、上人感涙肝に銘し、百拝して雷山に帰り、諸堂建立成就し、又此山に來たり、手づから薬師如来・十二神将を彫み、「不知山瑠璃光寺」と名付けらるゝ処は山の頂上なり、其の本堂の跡を、いまに堂得と

いふ、其節沖の船、帆をさげざれば、風発て舟をくつがへさんとす、これに依り山の中辺に本堂を立替え奉る、其時南の大道を通るもの、下馬をせざれば必ず落る事、又度々なり、故に本堂の戸をたへず差詰奉る、

其の後、天文の初(1530年頃)、天火にやありけん、本堂御本尊・十二神将皆焼失に及べり、村中大いに是を悲しみけるに、程なく一村の男女、十五才を末とし、残らず夢の告にいわく、「我時節到来して火難にあへり、然りといへども、今壹岐国風本(勝本)の奥、山下に孫二郎といふ百生の木戸先、家に向へば右の藪の中に大きな椿の木有り、其の木の中に隠れ居る也、急に舟を仕立、迎に参るべし」と、両夜続けて同じ夢、早々公辺に言上し、彼島へ渡り尋けるに、告のごとく孫二郎木戸の藪に、大木の椿有り、夢の告を語り其木を貰い請け、薬師如来・十二神将をきざみ奉る、不思議の異仏なり、其の焼たる山の中辺、いまに穢れたる物を上げず、爰を堂阜といふ草野なり、御本尊椿にてきざみ奉る後、此処に写し奉る、委しくは本縁起に見へたり、爰に略して是をかく瑠璃光寺略縁起終

以上によると、瑠璃光寺は雷山千如寺の開基である清賀上人によって開創されたこと、開創時に上人自らが彫ったとされる薬師如来像と十二神将を祀っていたこと、創建当初は火山山頂付近の「堂得」という場所に鎮座していたことなどが読みとれる。また、沖合いの船が帆を下げないと海が荒れることから、開創からほどなくして山の中腹に堂を移したとあり、その後、天文年間に一度本堂・本尊共に焼失し、壱岐勝本の樁材をつかって仏像を再び製作した顛末が記される。

現在の本堂にある瑠璃光寺本尊は、江戸時代に製作されたとみられる薬師如来立像で、旧本尊(縁起にある天文年間製作のものか)の尊像も現存しており、平成14年に修復されて、境内の薬師堂に祀られている。また、この縁起には登場しないが、雷山大悲奥院の記録類によると、千如寺の末寺であった瑠璃光寺は宝暦年間に雷山千如寺の僧、実相によって再興されたことがわかる。

以上の記録類から、瑠璃光寺の開創時期は、不詳ながらも雷山千如寺などと共に奈良時代まで遡る可能性があり、糸島地域で最も古い時期に開創された寺院のひとつと捉えることができる。また、現在の瑠璃光寺は火山山腹に南方を正面として境内を構えるが、これは元来、山頂付近(堂得という地名が今も残る)にあったものが現境内地へと移転したとみることができ、その移転時期は、(1)創建からほど近い時期、(2)天文年間、(3)宝暦年間の三つの時期のいずれかであった可能性が考えられよう。

本報告の経塚資料の埋納された時期が、一般的な経塚の埋納時期(11世紀末から12世紀前半)と想定すると、(2)(3)が移転時期ならば、それより前に現地(現境内地近く)に埋納されていたことになる。経塚群が形成されてまもない時期にそれを壊す可能性のある隣接地を造成し新たに境内を形成することは考えにくいことから、山頂付近にあった本堂は、創建からほど近い時期に現境内地に移転してきたとするのが妥当であると考えたい。つまり、創建からほど近い時期に現境内地に本堂が移転し、その近くに経塚群が形成されたのではないかと推察されるのである。

(3)瑠璃光寺経塚の採集遺物 (図2)

以上の経緯で採集された遺物の中で、経塚に関

連しているとみられる遺物には、青銅製経筒片(1点分)、白磁合子(蓋1点・身2点の計3点)、外容器とみられる陶製壺がある。以下にこれを紹介する。

銅製経筒 (図2-1)

銅製経筒片は、バラバラに分散して採集されているが、八花形でつまみ付きの蓋部、薄い円盤の底部、ゆるく屈曲した高台1段がつく基部片、断面が変形した筒身片多数などがあり、これらで1本分のものであろうと考えられる。

蓋部は、宝珠つまみをもつ平面が八花形の被覆式傘蓋で、高さ約3.5cm、内径約10.5cmを測る。全体的にやや大ぶりの感がある。蓋部外表面には所々に鍍金された痕跡が観察できる。

筒身は全体的に器壁が非常に薄く脆いため破損が著しい。また、削平され発見される前から、既に土圧等で器形が変形していたようであり形状の復元が困難である。最も残りの良いもので残存高約8cmの1段分しか残存しておらず、積上段数などは不明である。

これら残存する筒身片には鋳留や銅板をあわせた継ぎ目などはみとめられないため、一鑄のものと考えられる。また、筒身片の中に突帯が一条分確認できることから、いわゆる四王子型に類するものであった可能性がある。

基部片は残存高約4cmを測り、ゆるく屈曲した高台1段がつく。

経筒の底板となると考えられる薄い円盤は、直径10cm・厚さ約0.2cmを測る。銅板表面は錆びついており、文様等は確認できないが、丸い経巻の付着跡が6箇所確認される。妙法蓮華経は8巻あるいは10巻であることが一般的であるため、その大きさなどからみて元来は8巻納入されていたものと考えられる。

筒身の遺存状態が悪く形状等に不明な点も多いが、蓋部等の形態的特徴から12世紀前半頃の所産であると考えている。

青白磁合子 (図2-2・3・4)

副納品と考えられる青白磁合子である。蓋1点・身2点分があり、少なくとも2セット分が出土している。蓋身が1組はセット関係となる。共に側面に菊弁文を配し、蓋は29弁、身は32弁を数える。外面の文様は、果実文と考えられる。

類例に保安元年(1120年)の京都府鞍馬寺経塚

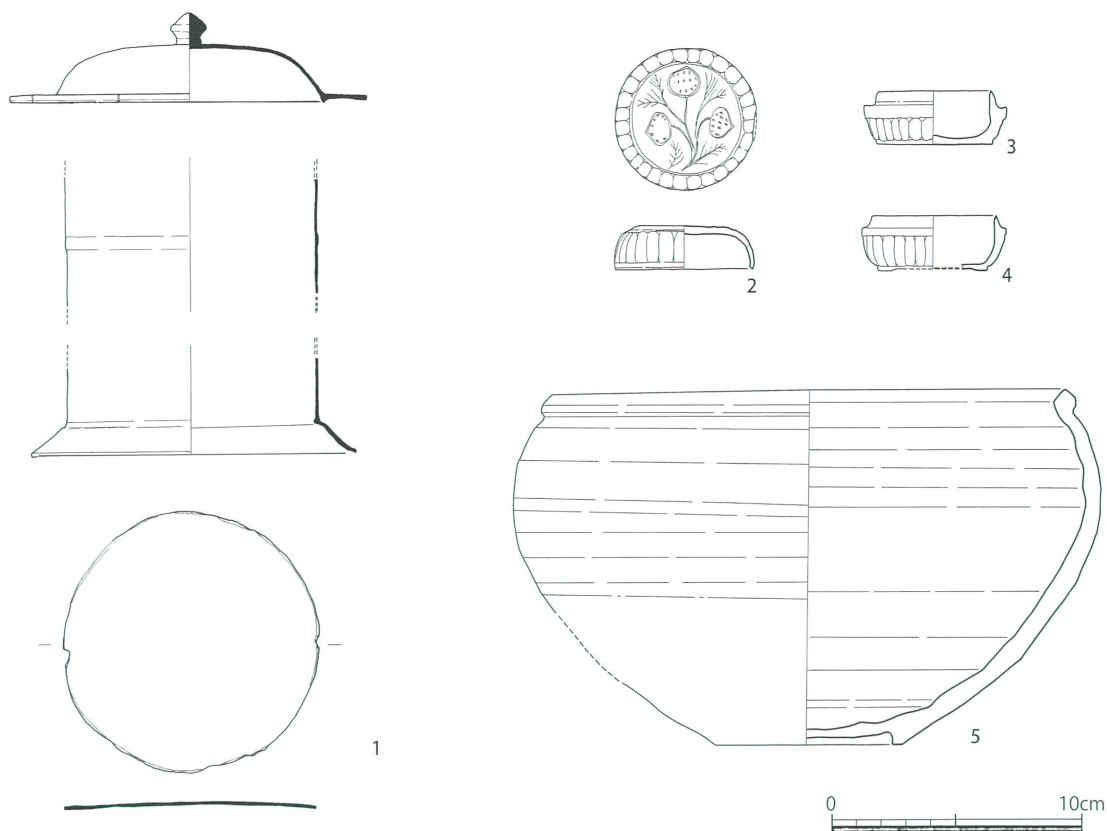


図2 火山瑠璃寺経塚出土遺物 (1/3)

出土品及び博多遺跡群R 4次調査地点出土のものが、ほぼ同時期の所産であると推定される。

鉢形陶製容器 (図2-5)

鉢形の陶製容器である。高さ14.2cm・口径20.5cm・底径7.8cmを測り、断面が玉縁状の丸く肥厚した口縁を呈する。

暗茶褐色の釉を体部内面から外面にかけて施し、体部外面の下位と外底部は露胎である。外面下位に回転ヘラケズリを施し、底部はやや上底となる。

これを経筒を納める外容器と考えた場合、単体では、高さが経筒より低くなると考えられ、何かしら別のものと組み合わせるなどしなければならない。

時期的も経筒・青白磁合子とはやや後出のものと考えられるため、同一の経塚から出土したものとは断定しにくい。

以上が瑠璃光寺経塚に関連すると考えられる主要な遺物である。経筒も筒身の大半を欠失するなど、これらの遺物がすべて同じ経塚のものか、は

たして単体（1基分）しか存在していなかったのか、などをこれらの資料から特定するのは、残念ながら困難な状況である。現在のところ、不明となっている欠失部分も含め、他にも相当数の遺物片が斜面土砂の中に埋没しているものと考えられる。

(4)瑠璃光寺経塚出土の意義

瑠璃光寺経塚の発見は、旧志摩郡西部域(旧志摩町域)において初めての経塚関連資料の出土であり、また出土状況や出土品の全体像は不明ながらも、出土地点を特定できた希少な事例となった。

出土品は、遺存状況がたいへん悪く、詳細を掴みにくい。銅製経筒はいわゆる四王子型に類する可能性のあるもので、筒身は大型に復元でき、蓋の一部には鍍金を施すなど、手の込んだつくりのものであったと評価される。

これら出土した経筒や副納された青白磁合子の形態から、埋納時期は12世紀前半頃の所産であったと推定しているが、一緒に採集された鉢形陶器の時期がやや後出のものとみられる点が少し気が

かりである。

本経塚が発見された瑠璃光寺を擁する火山は、これまで海上の目印として信仰の山であったとの伝承が知られてきたが、今回の経筒の出土によって、少なくとも中世までには、山頂部から現境内地付近にかけて山岳仏教寺院が存在し、信仰の拠点となっていたことが明確になったといえる。

また、当寺の開基が、糸島において他の経塚資料の出土が知られる、雷山など背振山系の山岳寺院と同じ「清賀上人」であることにも留意しておく必要があるだろう。後述するが、こうした渡来僧に由来がある山岳寺院の所在地と経塚の出土地との関連性も高い傾向がみてとれる。さらにいうならば、それらの寺院の立地は、今回の火山瑠璃光寺のように、その多くが玄界灘を見渡すことができる、あるいは海から見た場合のランドマークとなる山の頂部付近をおさえている。こうした立地にみえる中世の寺院造営と玄界灘の海上交易活動との関連性も指摘されるのである。

III 糸島地域出土の経塚関連資料集成

(1) 糸島出土の経塚資料

本項では、先述した瑠璃光寺経塚を含め、これまで出土した糸島地域の経塚資料を集成する。

糸島では、これまでに12箇所、経塚出土地が知られている。近年では、平成26年に二丈岳山頂近くの穴観音にて陶製経筒が発見されるなど、新たな発掘事例も知られるようになったが、それ以前の多くが不時発見であったり、また、発見から長期間が経過し記録類が散失してしまっており、出土位置・出土状況を特定することが困難なものが多い状況である。

以下、a～kまで出土地と出土遺物について概要をまとめてみたい。

a. 如意経塚（糸島市大門）（表3-a）

高祖山西麓に如意とよばれる集落があり、この集落の東奥に位置する妙立寺の北側、南向きの斜面で、昭和42(1967)年に発見されたとされている。

如意経塚の出土遺物は、後述する大門経塚の出土遺物とともに、福岡県立糸島高等学校郷土博物館(以下、郷土博物館)に収蔵されている。しかし、現段階では、如意経塚と大門経塚とでどの遺物がどちらの経塚から出土したかについて、はっきり

断定できない状況になっている。本稿では、昭和22(1947)年に作成された糸島中学校郷土室の『考古目録』、昭和47(1972)年に作成された『前原町文化財地名表』(以下、『地名表』)(註6)、小田富士雄氏の報告(註5)を参考にして資料を紹介する。

如意経塚出土の遺物は、『地名表』によると「銅製経筒3、外筒一組など」となっている。小田氏は、銅板製経筒と青白磁合子を如意経塚出土と報告している(註5)。

銅(板)製経筒（図3-1）

方形銅板を蓋とする銅板製経筒である。筒身は1枚の銅板を丸めて鋳留し、口縁部を1枚の鉄帯で巻きつけている。筒身下部を折り曲げ、別づくりの銅板をはめこんでいる。内底面には、経巻1巻分の痕跡が確認される。筒身は復元高24.0cm、口径7.0cm、底径9.5cmを測る。蓋は厚さ0.2cm、約12.0cm×約11.0cmの方形を呈し、ほぼ中心に径0.5cmほどの孔をあけている。蓋の片面には、筒身の口径と一致する円形の痕跡が残る。

また、この銅板製経筒にともなっていたと考えられるガラス玉が85点ほど残存している。その中には孔中に銅線が入ったまま残っているものもあり、銅線をとoshi繋ぎあわせて使用していたことが推察される。武蔵寺4号経塚(福岡県筑紫野市)出土の銅板製経筒にみられるように、ガラス玉は、経筒の蓋の孔から瓔珞として垂下して使用するが多い。宮小路賀宏氏は、瓔珞と異なる装飾法の例として、特別史跡水城跡の西門跡に接する土塁上で発見された経塚出土遺物をあげている。この経塚からは、銅板製経筒とガラス玉378個、金銅製飾金具5種10片が出土しており、宮小路氏は、この経筒の蓋に瓔珞を垂下するための孔がないことから「ガラス玉を飾り金具や銅線・鎖でレースに編み、まるで花嫁を飾るブーケのように経筒に被せたのではないかと」しており、瓔珞以外の装飾法を想定している(註7)。本経筒も蓋の一隅に孔があいていたような痕跡がみられながらも、垂下に適さない中心部にも孔があることや蓋と筒身を固定させる必要性があることなどから、経筒の緊縛と莊嚴をかねて巻きつけていた可能性も考えられよう。

銅製経筒（図3-2）

法量は総高27.5cm、筒身高24.7cm、口径

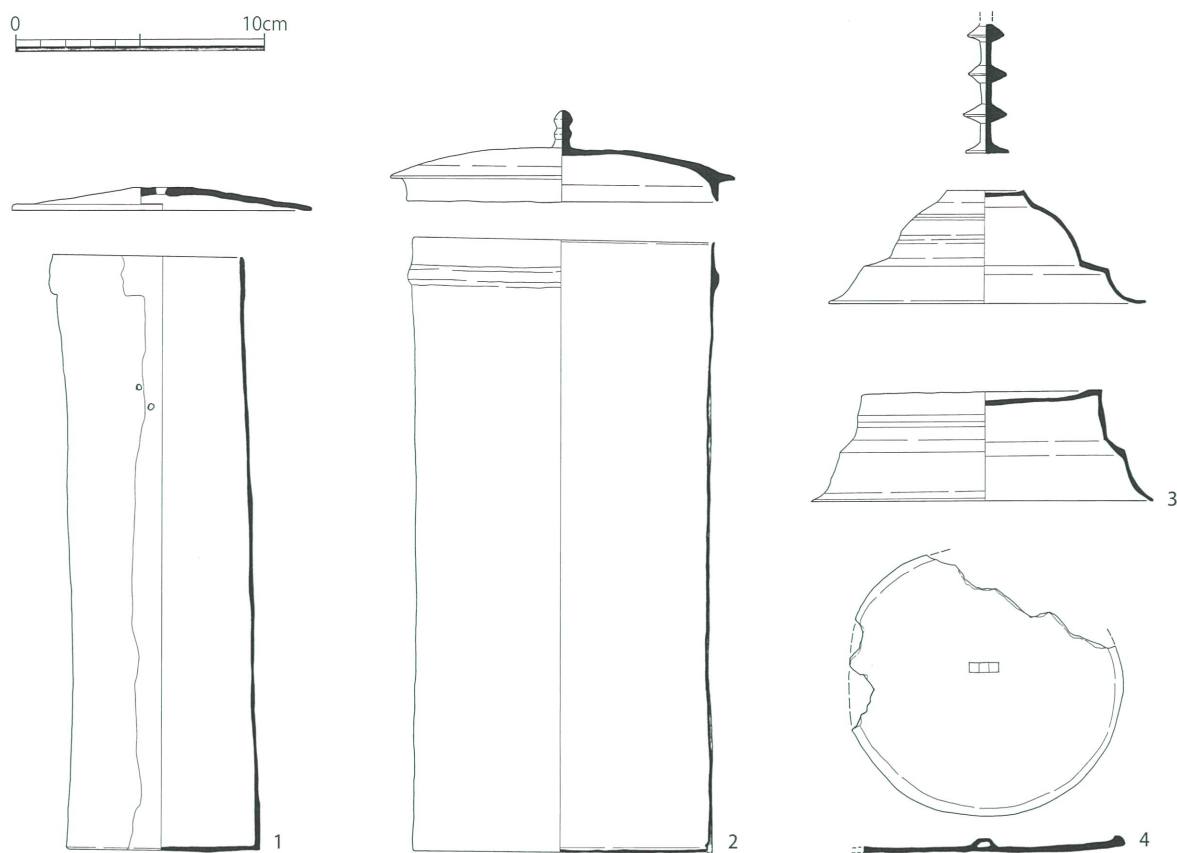


図3 如意経塚・大門経塚出土遺物 (1/3)

11.5cm～12.0cm、底径12.0cmを測る。銅板をはりあわせた痕跡などがみられないため、鑄造により製作されたものと考えられる。筒身上部には突帯を1条もち、下部は底板の銅板をはめ込めるように内側に細工がなされている。内底面には、経巻の痕跡が8巻分確認できる。蓋は高3.7cm、径12.3cmほどの傘蓋で、宝珠と簡略化されたと思われる相輪が1輪ついた刹がある。

滑石製外容器

箱状の大型の滑石製外容器である。4分の1程度が石膏で復元されており、破損部は蓋と身をあわせた場合に符号する。蓋は高13.7cm、身は高15.3cmほどで身部の口径は復元34.0cm×20.5cmを測る。この中に経筒等を納入していたと考えられる。

青白磁合子

壺型合子である。蓋はなく、身のみ残っている。高3.5cm、復元口径2.7cm、底径2.7cmを測る。なお、この壺型合子の類例としては、山田経塚出

土遺物(福岡県宗像市)、武蔵寺第10号経塚出土遺物(福岡県筑紫野市)などがある。

紙本経残欠

炭化状になっている経巻残欠である。どちらの経筒に伴うものかは定かでない。軸部を観察すると、径が約0.15cmと非常に細く、笹などを軸部として用いていたことが考えられる。

b.大門経塚(糸島市大門)(表3-b)

如意経塚の南西部に位置する大門地区で発見されたと伝わる。『考古目録』では、大正15(1926)年の10月5日に岸原義亮氏によって、「小山の土取りの際に地下一丈ばかり椎の大木下」から出土したと記されているが、出土状況等の詳細についてはこれ以上の情報はない。

ここでの出土遺物は、『地名表』によると、「銅製経筒1、刀子、湖州鏡1など」と記されている。小田氏は、積上式経筒を大門経塚出土と報告している(註5)。

銅製経筒（積上式経筒）（図3-3）

筒身を欠失しているが、相輪刹・蓋・台座が残る積上式経筒である。

筒部の段数は不明。相輪刹は頂部が欠けているが、算盤玉状の相輪が3輪あり、基部は平滑になるよう調整し、蓋の頂部に孔があいていないことから相輪刹を蓋に据えて置いていたことがわかる。残存高6.3cmを測る。

蓋は平面四花形の傘蓋で、高4.5cm、最大径12.7cmを測る。台座は平面五花形で、頂部はやや凹面になる。高さ4.3cm、頂径9.7cm、最大底径4.3cmを測る。蓋・台座ともに体部に数条の沈線が廻る。

銅鏡（図3-4）

断面方形のつまみをもつ平面円形の銅鏡で、断面はやや凹面に湾曲している。『地名表』にある湖州鏡と考えられるが、「湖州」の陽刻痕跡などがみられず、素文鏡とみたほうが妥当であろう。厚さ0.2cm、復元径11.0cmを測る。

刀子

残存長23.5cmを測る刀子が1点出土している。

c. 築山観音堂経塚（糸島市三雲）（表3-c）

糸島市三雲に所在する。現在、築山観音堂という小堂の敷地付近で、舶載の灰緑色無釉の陶製経筒片や秋草文のある青白磁合子蓋の半欠などが採集されている。当該地は、4世紀後半頃築造とみられる築山古墳の墳頂部にあたり、墳丘上に経塚があったと考えられる（註8）。

他にも現観音堂付近には、中世に遡れる板碑や五輪塔などの部材が散見され、当該期に寺院が存在していた可能性が高い。

d. 飯氏経塚（福岡市西区飯氏）（表3-d）

飯氏経塚は、福岡市西部の今宿平野を望む山麓上にある兜塚古墳の墳頂部に位置する。

兜塚古墳は1994年度から継続して行われた発掘調査により5世紀後半の前方後円墳であることが判明し、鋌留短甲や馬具類などが出土している（註9）。

経筒等の資料は、その発掘調査以前に発見されていたもので、詳細な出土状況は不明であるが、出土経筒とともに図面が保管されている。また、『周船寺村誌』には、昭和33(1958)年3月23日

に墳丘上部を納骨堂用地として整地した際に塚の中心部から発見されたと記される（註10）。

出土遺物は、銅製経筒と土製外容器があり、現在、銅製経筒は福岡市博物館に、土製外容器は糸島高校附属郷土博物館に収蔵されている。それぞれの遺物が別々に収蔵された経緯ははっきりしていないが、銅製経筒については、元来は飯氏経筒保存会が保管していたが、福岡市教育委員会に寄贈された後、福岡市博物館に移管されたという。

銅製経筒（図4-1）

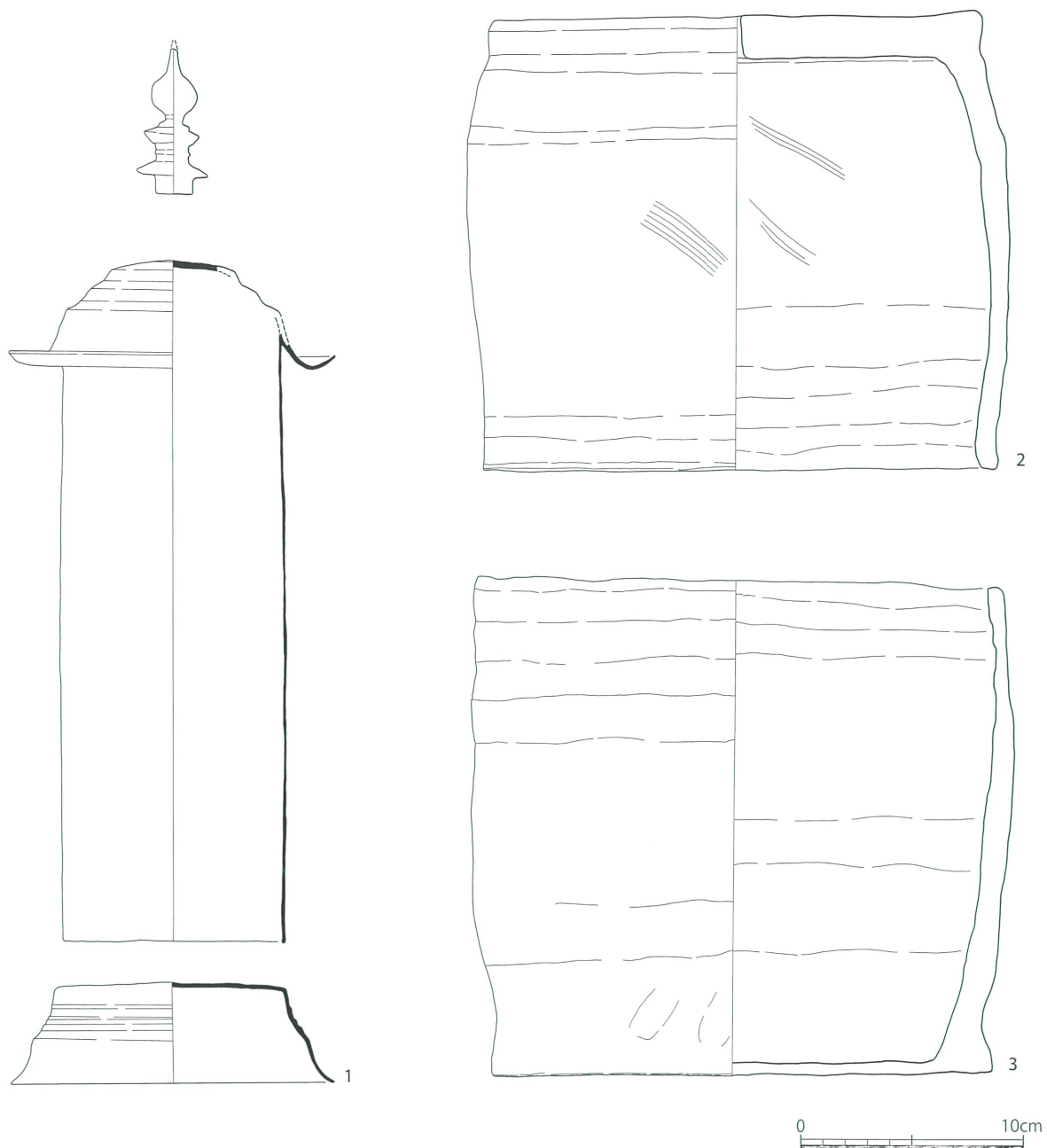
二つの鑄造製の半円筒を縦に継ぎ合わせて筒身にする半円筒接合式経筒である。総高は44.5cmを測る。

相輪刹の頂部は少し欠けているが、球状の宝珠を頂き二輪をつけるもので、蓋に据え置きされる。相輪刹の残存高は6.7cmを測る。相輪刹基部は、平滑に調整した後に「×」印をつけているように観察される。蓋は平面円形で反りのある縁をもっており、頂部に相輪刹の基部の印と符合するような「×」印をつけている。高さ5.0cm、最大径15.0cmを測る。

蓋と身はくっついて一体化している。筒身は高さ28.3cm、径10.1cmを測り、内部に溶接して繋げた痕跡がみられる。台座は平面円形で、高さ4.5cm、底径14.6cmを測る。台座の頂部は平滑に整えようと、調整痕が残るが、やや凸面となっている。蓋、台座ともに数条の沈線を廻らせる。

近年、この銅製経筒と近似したものが、佐賀県唐津市の古園遺跡SX03経塚から出土しており、調査を担当した小松譲氏によって詳細な資料の比較・検討がなされている。一見、本経筒は積上式経筒と構成が似ているが、小松氏は相輪刹、蓋、筒身、台座の各部位の分類をおこない、積上式経筒の各部位の組み合わせと異なることを指摘している（註11）。この見解に従えば、古園例に形態がよく似た本経筒についても、積上式経筒とは別の一群に位置づけられると考えられる。

本経筒の類例としては、先述の古園遺跡SX03経塚出土例とは別に、奈良国立博物館収蔵の伝大分県出土例（註12）があり、小松氏は、この3例を「同鑄型経筒であり、同一工房で製作された」と考えている。また、福岡市西油山経塚出土と伝わる経筒の中に、相輪刹の形など少し異なるもののその他の部位がよく似た資料が存在しているこ



第4図 飯氏経塚出土遺物 (1/3)

ともここで指摘しておきたい(註13)。

土製外容器 (図4-2・3)

円筒形のほぼ径の等しい櫃形の土器が2点あり、両者の口を双方合わせて外容器として使用したとみられる。このような形状の外容器は非常に珍しいものといえる。

この土製外容器は、素焼き粗製のもので、調整もあまり施されておらず、器体の内外面に積み上げられた粘土紐帯の接合跡が顕著に残る。

身であると考えられるほうの容器は、高さ22.3cm、口径23.6cm、外底径22.8cm、内底径18.0cmを測る。内底面には、うっすらと経筒の台座跡が残っており、これを復元すると現存する経筒の径とほぼ一致する。

蓋であると考えられる容器は、高さ20.5cm程で、外頂径21.9cm、内頂径18.0cm、口径22.5cmを測る。頂部のほぼ中心に内側から穿孔されている。孔付近には青緑色の色素付着痕があり、宝珠先端

部が密着していた跡と考えられる。

実際に、これらの容器を合わせても、経筒の高さには若干足りないことから、それを補完する形の処置で穿孔を施したのであろう。蓋、身ともに内外面の所々に炭が付着しており、木炭を内外に充填して埋納した様子が窺える。

e.伝井原経塚（糸島市井原）（表3-e）

出光美術館が所蔵する積上式経筒に「福岡県糸島郡怡土村大字井原」の付箋が伴っており（註14）、現在の糸島市井原近辺で出土したものと伝わる。出土地・出土状況等の詳細は不明である。

銅製経筒

総高36.7cmを測る二段積上式経筒である。相輪利は蓋の頂部に孔をあけ挿入している。相輪利の頂部は欠損しているが、本資料を観察した小田氏は平形の相輪が3輪あったのではないかと推測している。

蓋は平面円形で、高さ5.4cm、径16.6cmを測る。筒身上段は径10.05cm～10.2cm、高さ12.9cm、筒身下段は径9.95cm～10.25cm、高さ13.6cmを測る。

台座は平面円形で、高さ3.1cm、底径14.7cm、頂部径11.0cmを測る。蓋、筒身、台座ともに、体部に沈線が廻っている。これらの表面には全体的に木炭片が付着している。

f.伝今宿経塚（福岡市西区今宿）（表3-f）

出光美術館が所蔵する積上式経筒に「福岡県糸島郡今宿村今宿」の付箋が伴っており（註15）、現在の福岡市西区今宿近辺で出土したものと伝わる。出土地・出土状況等の詳細は不明である。

本資料について、桃崎祐輔氏は、怡土郡七ヶ寺のひとつである鉢伏山金剛寺に関連する経塚であると推測している（註16）。これに対し、大庭康時氏は、金剛寺の所在地は大字上の原に含まれ、大字今宿とは隔たった立地であることから即断はできないとしている（註17）。

銅製経筒

総高43.85cmを測る段数四段の積上式経筒である。相輪利は宝珠と算盤玉状の相輪が4輪あり、相輪利を蓋に据え置いている。相輪利付の蓋は平面円形で、高14.25cm、径12.9cmを測る。

筒身は、径9.2cm～9.3cm、高6.65cm～6.9

cm、厚さ0.1cmの円筒4個を積上げている。台座は平面円形で、高4.1cm、底径14.2cmを測る。

なお、この経筒には4個の円筒を重ねた最上段から最下段の外面と、最上段円筒の内面に墨書銘が記されている。銘文は以下のとおりである。

[表面の銘文]（/と／は筆者による加筆で、/が沈線、／が段の区切りを示す）

/為／尼/妙経／尊/靈／往生/施入
/保延／二年/十月／廿一日/乙卯／李太/子之

[最上段円筒内面の銘文]

李太子為勝母尼妙経為往生施入如右

この銘文によると、本経筒は李太子なる人物が母尼の追善供養のために埋納したものであることがわかる。この李太子について、小田氏は、万寿3(1026)年、関白藤原頼通に名籍を進め宝物を献じて日本の爵位を望んだ周良史の例を念頭に置いた上で、「母を日本人とする国際混血児であり、博多周辺に居留地をもっていたものであろう（中略）太子の称を記しているからには宋朝貴族に系譜上の縁故を求めた人物であろうが、それが事実であったか、また日本での居留、活動に優利を考えたための詐称であったかは不明というほかはない」としている（註18）。桃崎祐輔氏は、この「李太子」を訓読した場合「りのおおいこ」となり、女性であった可能性も指摘している（註19）。また、服部英雄氏は、大分県豊後高田市加礼川出土の銅箱の「太中臣六子・太中臣中子・太中臣太子」の記述から、それぞれが区別されているとし、「太子」について長女を指すものと判断した。さらに、唐より招来されたとなっている京都府清凉寺釈迦堂本尊の胎内文書に「施大娘・杜太娘・徐大娘」とあることから、中国では長女を「太娘」と表わすとし、「太子」表記は日本人が銘文を記したという理由だけでなく、事実上の日本人化の表れとしている（註20）。

女性と経塚の関係について述べた山川公見子氏は、女性の立場を「一つ目は女性が埋経作善の願主および施主あるいはそれに準ずる場合、二つ目は女性が埋経作善に従属的な結縁の場合、最後は男性が女性の供養等のためにおこなった埋経の場

表1 中国人銘経容器（桃崎2012を改変）

番号	出土地	経塚遺物	年代	中国人関連銘	銘文	共伴遺物	立地	遺構	所在	参考文献
1	首羅山白山神社経塚 (福岡県糟屋郡久山町)	四段積上式経筒	1109	台座裏に「徐工」墨書。 桃崎2008・2012では「工」を花押や略押の可能性ありとしている。 この横に文字を訂正した跡がある。	「奉納志／敬白／如法蓮華經六十六／部内書寫一門眷属／代々恩災延命七難／即絶爲妙香現世二／世安穩乞大願／爲奉納也／施主□□□□／天仁二巳丑□□□□日／大勸進僧 実□」	黄釉鉄彩四耳壺1 (外容器)、舌口式短刀1、八花形湖州鏡1、平形合子1	山頂	不明	九州歴史資料館蔵	宮小路1999、桃崎2008、2012
2	英彦山北岳(福岡県田川郡添田町)	三段積上式経筒	12世紀前半	台座裏面に「王七郎」墨書。宮小路・根来・磯村1985では「王七房」。		木炭	山頂	有室	英彦山神宮蔵	宮小路ほか1985
3	伝太宰府北山(福岡県太宰府市)	四王寺型経筒	1121	「宋人友諒并妻子蕭々等」	「太宰府北山／清瀧寺住僧(純)仁并 助成／宋人友諒并妻子蕭々等／爲現當二世之悉地圓滿也 仍記之供万歳／保安二年玖月廿九日□」	不明	不明	不明	和泉市久保惣記念美術館蔵	中野1990
4	若杉山佐谷観音谷1号経塚(福岡県糟屋郡須恵町)	二段積上式経筒	1125	「宋人馮榮 伏」弟子鄭蔭	「乙巳年六月初乙日 宋人馮榮伏／ 執筆僧源琳 清秀／嚴淨寛義／禪宗 延範／□□ 寛□／妙法蓮華經 弟子鄭蔭／天治三年 丙午次日辛未／勸進僧經尋／散位藤原朝臣木貞／□□□□」	素焼壺1 (外容器)、木炭	山腹	無室	東京国立博物館蔵	島田1926、蔵田1966
5	伝福岡県福岡市今宿(福岡県福岡市西区今宿)	四段積上式経筒	1136	「李太子」。表面と最上段円筒内面に墨書。	表面「爲 尼妙経 尊靈 往生施入／保延 二年十月 廿一日乙卯 李太子之」最上段円筒内面「李太子爲勝母尼妙経爲往生施入如右」	不明	不明	不明	個人蔵(九州国立博物館保管)	小田1980
6	伝大分県宇佐(大分県宇佐市)	四段積上式経筒	1139	「陳」浮」。蓋裏に「陳□」浮」墨書。森井2008では「陳□□」としている。	「奉□我□法□□□陳□／(一行不明)／保延五年十月□日(勸)進僧寔喝」	褐釉鉄彩四耳壺1 (外容器)	不明	不明	九州国立博物館蔵	森井2008、桃崎2012
7	伝福岡県(福岡県)	四段積上式経筒	1141	台座裏に「陳」墨書。	「保延七 年歲次辛酉二月 十五日勸進 延暦寺族姓大神／僧定 尋長寿丸」	滑石製外容器1	不明	不明	奈良国立博物館蔵	奈良国立博物館1977、三輪1985
8	伝筑後地域(福岡県筑後地域)	陶製経筒ⅠB類	12世紀	底部に「李」墨書。		不明	不明	不明	所在不明	小田1966
9	豊前坊経塚(1号) (福岡県遠賀町)	陶製経筒ⅠC類	12世紀	蓋裏と底部に「仁」墨書。		青白磁合子片	古墳墳丘上	無室		
10	豊前坊経塚(2号) (福岡県遠賀町)	陶製経筒ⅠC類	12世紀	蓋裏と底部に「仁」墨書。		なし	古墳墳丘上	無室	遠賀町教育委員会蔵	宮小路ほか1996
11	豊前坊経塚(3号) (福岡県遠賀町)	陶製経筒ⅠC類	12世紀	底部に「仁」墨書。		なし	古墳墳丘上	無室		
12	四王寺山四王寺道経塚群B経塚(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒ⅠA類	12世紀	底部に「莊綱」墨書。 ※亀井氏は「莊納」墨書としている。		木炭	上方山腹	有室	太宰府天満宮蔵	小田1966、亀井1986
13	四王寺山毘沙門堂経塚群B-2経塚(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒ⅠC類	12世紀	底部に「陳□」墨書。		陶製経筒ⅠA類2、経巻残欠、木炭	山頂	無室	福岡県立筑紫丘高等学校(九州歴史資料館保管)	島田1927、小田1966、九州歴史資料館2012
14	伝四王寺山(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒ⅠA類	12世紀	底部に「陳」墨書。		経巻残欠1	不明	不明	九州国立博物館蔵	森井2008
15	京ノ隈経塚(1号) (福岡県福岡市西区田島)	外容器蓋(黄釉鉄絵文大盤)	12世紀	外底部に「麦□」の墨書。		銅板製経筒1、須恵器甕1 (外容器身)、埴形合子3、平形合子1、鉄鏝2、刀子1、毛抜き1、宋銭1、数珠主多数、木炭	古墳墳丘上	有室	福岡市博物館保管	山崎1976
16	出土地不明	陶製経筒ⅠA類	12世紀	蓋裏に「陳」墨書。		不明	不明	不明	九州歴史資料館蔵	九州歴史資料館2012

※陶製経筒の分類は杉山1998を参考にしている。

表3の参考文献

小田富士雄1966 「九州発見の陶製経筒」『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館
 小田富士雄1980 「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『出光美術館館報』32 出光美術館(小田富士雄1988 『九州考古学研究歴史時代各論編』小田富士雄著作集6 学生社、収録)
 亀井 明徳1986 「綱首・綱司・綱の異同について」『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
 九州歴史資料館2012 『北部九州の霊山と経塚』九州歴史資料館
 蔵田蔵1966 「経塚論十二、東京国立博物館保管、九州地方出土の経塚遺物(上)』『MUSEUM』181 東京国立博物館
 島田寅次郎1926 「築造時代の明らかなる経塚」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』2 福岡県
 杉山洋1998 「北部九州の陶製経筒」『植崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
 中野徹1990 「181 青銅 経筒 伝太宰府北山出土」『増訂和泉市久保惣記念美術館蔵品選集』和泉市久保惣記念美術館
 奈良国立博物館1977 『経塚遺宝』東京美術
 宮小路實宏・根来昭仁・磯村幸男1985 『英彦山修験道遺跡』添田町教育委員会
 宮小路實宏・武田光正1996 『豊前坊古墳群・経塚』遠賀町文化財調査報告書第8集 遠賀町教育委員会
 宮小路實宏1999 「経筒資料覧書(二)」『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
 三輪壽六1985 「積上式経筒試論」『日本史の黎明—八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
 桃崎祐輔2008 「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
 桃崎祐輔2012 「首羅山遺跡の白山神社経塚について」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告第16集 久山町教育委員会
 森井 啓次2008 「墨書宋人銘の書かれた経筒」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下巻 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
 山崎純男1976 「京ノ隈遺跡」段谷地所株式会社

合」に分類しており、本経筒を最後の場合に分類しているが、「李太子」を男性とする根拠については述べていない（註21）。

この「太子」には女性を示す語句が付随していない例もみられるため、男性の可能性を否定できないが、女性とみたほうが妥当であると考えられる。いずれにせよ「李太子」は日本人化に近づいた国際混血児という見方が可能であろう。

ところで、本経筒は数少ない中国人の名が記されたものとして注目される。いわゆる中国人銘経筒は、森井啓次氏や桃崎祐輔氏らによって集成されているが（註23）、本稿においても別表のとおり中国人銘経容器（本稿では福岡県福岡市京ノ隈経塚出土の外容器の蓋も含めているためこの呼称を使う）を16例、花押の可能性のある記号が記された経容器を7例確認している（表1・表2）。

妙楽寺経塚2号経塚(大分県宇佐市)の経容器の身に使われた褐釉系白磁四耳壺底部の「嚴」は、求菩提山中興の祖「頼嚴」との関連が指摘されている（註24）。しかし、「嚴」という姓は中国でもみられるもので、『百家姓』によると、その原籍地は天水郡(甘肅省)であるという（註25）。中国人銘の可能性が高いとも考えられる。

森井氏は、底部や蓋部の墨書中国人銘のものに関しては、願主や施主を示すものではなく、福岡

市博多遺跡群で出土が顕著である墨書陶磁器と同じく、生産・流通そのものにかかわった中国人であるとしている。あわせて、積上式経筒自体が中国からの舶載品である可能性も指摘している（註26）。森井氏のいうように、積上式経筒を舶載品と考えた場合、ふたつの問題点が生じる。ひとつは、陶製経筒も同様であるが、中国での積上式経筒の出土例がみられないということ、もうひとつは、大宰府条坊跡第19次調査地点の黒灰色土層から相輪部の製作時未成品が出土していることである（註27）。

これらの問題については、積上式経筒も陶製経筒のように日本向けの専用商品として日本から注文を受け、中国で製作されたと考えることも可能であり、すべて舶載でなく一部を中国でまかなっていたと解釈することもできる。

また、経筒資料の鉛同位体測定をおこなった平尾良光氏は、西暦1150年頃を境として、経筒の材料が日本産から中国産へ変換した傾向がみられるとしている（註28）。また、積上式経筒については、今のところ中国産であるとの結果もでている（註29）。

しかし、平尾氏の調査成果からもわかるように積上式経筒以外のものでも中国産という結果がでていることや、他の銅製品の素材を転用した可能

表2 中国人銘の可能性のある経容器

番号	出土地	経塚遺物	年代	墨書内容	共伴遺物	立地	遺構	所在	参考文献
1	求菩提山(上宮地区第20区)(福岡県豊前市)	陶製経筒ⅠB類(1号経筒)	12世紀	蓋裏に花押や略押の可能性のある墨書。	陶製経筒ⅠB類1、銅製経筒1	山中	無室	国玉神社(求菩提資料館保管)	宮小路1999、桃崎2008、2012
2	求菩提山(上宮地区第20区)(福岡県豊前市)	陶製経筒ⅠB類(2号経筒)	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。	陶製経筒ⅠB類1、銅製経筒1	山中	無室	国玉神社(求菩提資料館保管)	
3	伝四王寺山(福岡県糟屋郡宇美町)	陶製経筒ⅠB類	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。 ※奈良国立博物館と後藤直氏のものとは向きが逆になっている。安高啓明氏のご教示によると、奈良国立博物館のものが妥当とのことである。	不明	不明	不明	福岡・田中丸コレクション	奈良国立博物館1977、後藤1987
4	英彦山南岳(福岡県田川郡添田町)	積上式経筒(台座のみ)	12世紀	台座裏に墨書。※欠失部分で読取困難。	不明	不明	不明	英彦山神社蔵	小田1979、宮小路1999
5	妙楽寺経塚2号経塚(大分県宇佐市)	経容器身(褐釉系白磁四耳壺)	12世紀	底部に「嚴」墨書。※報告書では僧侶の名前と報告。	白磁碗(経容器蓋)、軒丸瓦1、平瓦1(瓦は石室の壁として使用)、木炭	寺院境内	有室	宇佐市教育委員会蔵	江藤2009
6	伝鶏足寺裏山(栃木県足利市)	経容器身(白磁四耳壺)	12世紀	底部に花押や略押の可能性のある墨書。	不明	山中	不明	足利市教育委員会蔵	足利市教育委員会2010
7	出土地不詳	陶製経筒	12世紀	底部に「□綱」の墨書。※蓋は不明	不明	不明	不明	九州大学考古学研究室蔵	森井2008

〈表2の参考文献〉

足利市教育委員会2010 『堀りだされた足利の歴史—平成20年度足利市埋蔵文化財発掘調査パンフレット—』足利市埋蔵文化財発掘調査報告書59 足利市教育委員会
江藤和幸(編)2009 『妙楽寺経塚』市内遺跡発掘調査報告書4 宇佐市教育委員会
小田富士雄1979 『英彦山の経塚』『北九州市立歴史博物館研究紀要』1(小田富士雄1988 『九州考古学研究歴史時代各論編』小田富士雄著作集6 学生社、収録)
後藤直1987 『重要文化財 青釉経筒』『福岡市の文化財—考古資料—』福岡市教育委員会
重松敏美・宮小路賢宏・杉山洋1978 『求菩提山 第三次の調査』豊前市文化財調査報告書3 豊前市教育委員会
奈良国立博物館1977 『経塚遺宝』東京美術
宮小路賢宏1999 『経塚資料展(二)』『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
森井啓次2008 『墨書宋人銘の書かれた経筒』『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下巻 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会

性もあることから一概に中国からの舶載品とは断定はできないであろう。例えば、飯沼賢司氏は、材料として銅鏡を転用した可能性を指摘している(註30)。

さらにもうひとつ考慮しておきたいことは、当時の中国の銅製品に関する時代背景である。宋代の寺鐘が、州県政の一翼を担う役割をもつようになったことを論じた金井徳幸氏によると、当時は厳しい銅禁の時代であり、仏具においても官製品あるいは、官をとおしたものでないと流通させることは許可されなかったという(註31)。このような当時の中国の国内事情をみても国外へ銅製品を流出させることは非常に厳しく、中国商人にとってもリスクの高い行為であったことが推察されるのである。

このように背景を鑑みた場合、積上式経筒については、中国からの舶載品ではなく日本製であった可能性のほうが高いものと考ええる。ただし、中国人銘銅製経筒の多くが積上式経筒であることは、中国人と積上式経筒に何らかの密接な関係性があったことを示唆している。

g. 山北経塚(糸島市山北)(表3-g)

雷山の麓から北の怡土平野へと派生する曽根丘陵の根幹部辺りの山北地区で発見されたと伝わる。発見年は不明であるが、当時の出土資料は、山北在住の井上勇氏から原田大六氏に託され志登支石墓群収蔵庫に収められたとされており、現在は伊都国歴史博物館に収蔵されている。

出土資料として、『地名表』には、「石鍋、外筒、経筒、合子、鉄剣、鉄刀」と記されている。

銅製経筒(図5-1)

いわゆる四王寺型経筒であり、蓋と筒身がくっついている状態である。法量は、総高24.8cm、推定筒身径6.7cm、底径8.5cmを測る。杉山洋氏の分類のⅢ式にあたり、その埋納時期は1120年代に比定される(註31)。底から中を覗くと、内側に経巻紙の残片が付着しているのが確認できる。底板をはめ込むつくりとなっており、ここに共伴している銅鏡がはめ込まれていたものと考えられる。

銅鏡(図5-2)

銅鏡は、直径7.2cm、厚さ0.1cmでつまみが打ち欠かれている。表面を磨かれ文様も消されてい

るが、和鏡と考えられる。鏡面を外側にむけ、底板として使用していたことが考えられ、九州で比較的多く出土する、底に銅鏡を転用した経筒の一例であるといえる(註32)。

陶製外容器(図5-3)

経筒を納入していたとみられる長胴壺がある。法量は、残存高27.8cm、底径8.7cmを測る。器形は若干歪んでおり傾いている。外面は上部外面全体に灰釉が施されるが、一部剥げており、外底部および内面は無釉となる。

口縁部は経筒を納入するためか打ち欠かされている。陶製外容器の内面は下部が膨らんでおり、経筒を容器内に納め置くと経筒蓋部が一部はみ出す形となる。このことから、これを保護する何らかの容器等を蓋として装着していたことが想定される。

青白磁合子(図5-4)

平形合子の蓋で、身は残っていない。蓋部は径5.4cm、高1.9cmを測る。側面に菊弁文を31弁廻らしている。甲の文様は不明瞭だが、七宝繋ぎ文と考えられる。所々に赤錆がつき、鉄剣や鉄刀の錆がついたものとも考えられるが、どの時点でどのような状況でついたかは定かではない。

滑石製石鍋(図5-5)

鍔付石鍋の完形品である。法量は、高さ7.1cm、口径17.4cmを測る。この石鍋は、法量から判断するに前述の陶製外容器と合わせちょうど良い大きさであり、蓋として装着されていたものと想定されている。

陶製外容器の蓋に滑石製石鍋を用いる類例としては、佐賀県鹿島市の片山第一号経塚が知られている(註33)。しかし、片山第一号経塚は、経筒が陶製四耳壺で蓋の滑石製石鍋との間に空間ができるのに対し、本例ではそのような空間はできない。長胴のため重い滑石製石鍋をのせると不安定となってしまう。そのため、この石鍋は外容器の蓋ではなかった可能性もここでは指摘しておく。

鉄剣

鉄剣は3片に分かれている。全体的に著しく錆びているが、残存部から両刃の剣であることがわかる。復元残存長は約58.5cmで、厚さ0.6cmを測る。なお、鉄剣を副納する同様の例としては、片山第三号経塚(佐賀県鹿島市)、座主経塚(佐賀

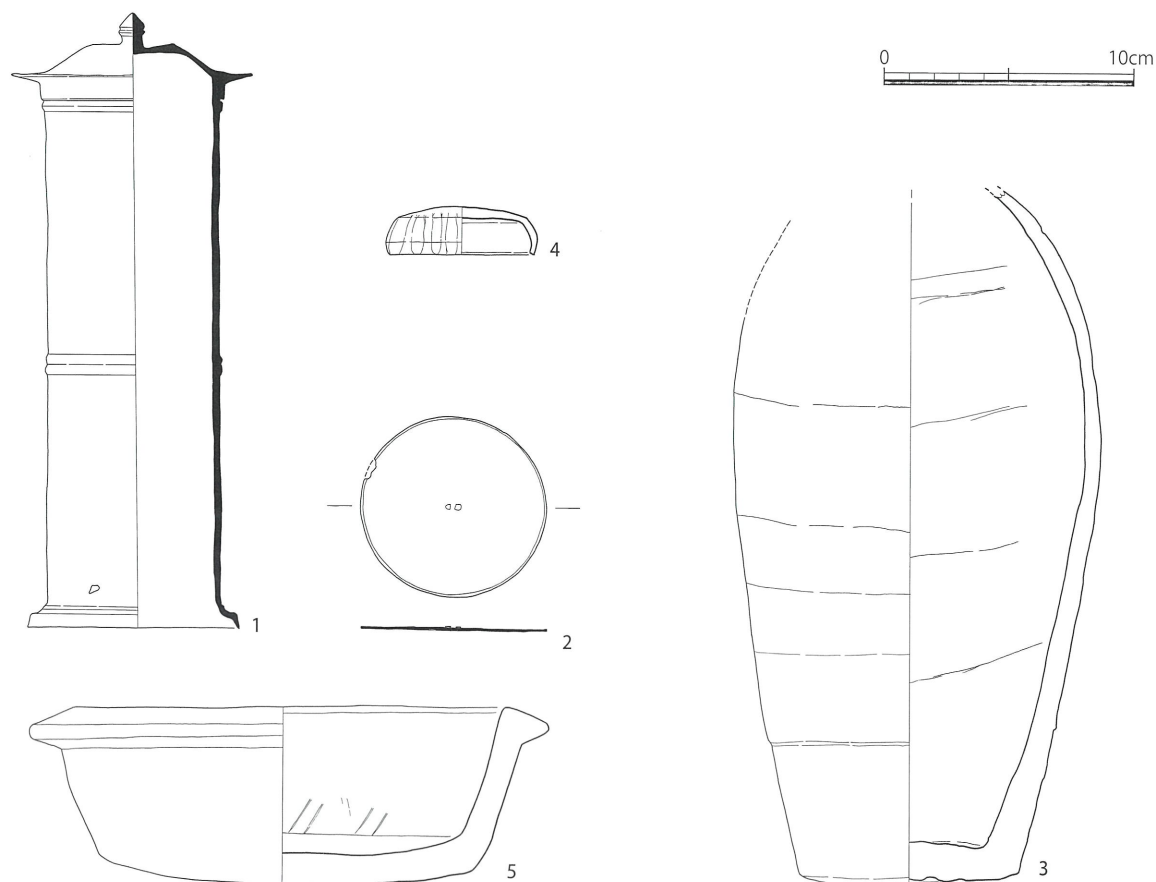


図5 山北経塚出土遺物 (1/3)

県東松浦郡浜玉町)が知られている(註34)。

鉄刀

鉄刀は6片に分かれている。全体的に錆が著しいが、刀の峰部、刃部がわかる。復元残存長は約53.8cmで峰部の厚さ0.5cmを測る。なお、鉄刀を副納する同様の例としては、片山第四号経塚(佐賀県鹿島市)(佐賀県教育庁社会教育課1970)、古園遺跡SX03経塚(佐賀県唐津市)(小松2013)が知られている。

h.伝雷山経塚(糸島市雷山)(表3-h)

雷山(標高955.3m)は脊振山系の一峰であり、その中心的な山岳寺院で、清賀上人が建立したとされる雷山千如寺が存在していた。千如寺は清賀上人にゆかりのある、通称「怡土郡七ヶ寺」の最大の寺院で往時は三百もの僧坊群が存在していたとされている。

江戸時代にまとめられた『筑前国続風土記拾遺』

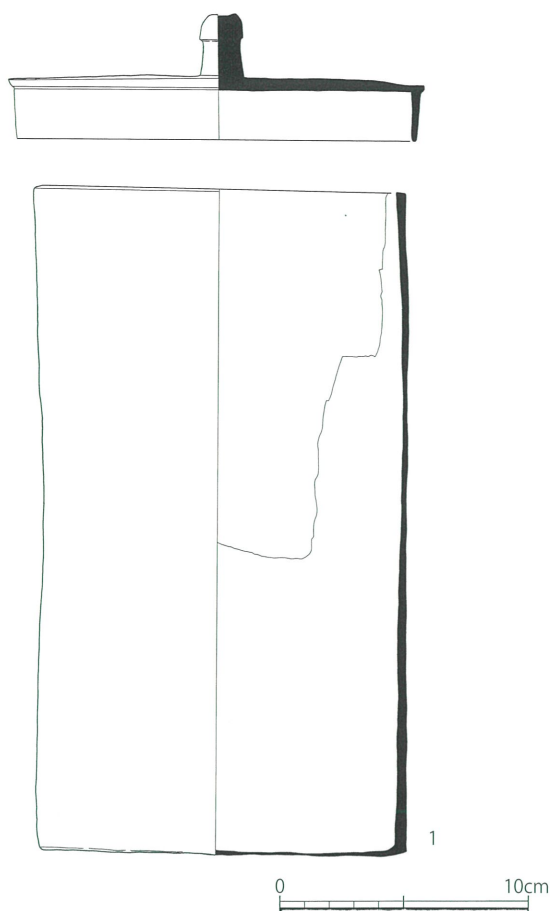
の「怡土郡下」にある上宮神社の項には、「絶頂に経塚あり。野石三ツ立」とあり、近世にはすでに経塚の存在が認識されていたことがわかる。

伝雷山経塚関連遺物としては、小田富士雄氏が記録を残した、寛治6(1092)年5月23日銘の四段積上式経筒がある(註36)。本資料は、記録された当時は福岡県教育委員会が保管していたようであるが、現在は所在不明となっている。

また、この資料とは別に現在、国立歴史民俗博物館には、詳細な出土地、出土状況について定かでないものの以下に記す伝雷山経塚遺物が現存する。

銅製経筒(図6-1)

総高29.8cmを測る銅製経筒である。蓋は円筒形の被蓋で、円筒形の刹をもち、刹は径約0.6cmで中心がやや凹んでいる。蓋は高さ5.0cm、径15.5cmの一鑄つくりとなる。筒身は高さ26.8cm、口径14.2cm、底径14.7cmを測る。



同左写真

2 外容器写真

図6 伝雷山経塚出土遺物（左実測図1/3、国立歴史民俗博物館所蔵）

表面には地金が残し、縦に調整痕がみられ、挽き板などを使用していないことがわかる。内面には溶接による補修の痕跡がみられ、そのため厚さも0.2～0.4cmと一定していない。内底面をみると、経巻跡が10巻分みられる。内底面には、金箔の痕跡もみえるが、この意味については定かではない。

また、この経筒の筒身表面には、針書き・タガネ彫り・墨書により銘文が記されている。墨書のうへに針書きしているものもあり、下書きをしていることがわかる。銘文については、後銘という可能性も否めないが、部分的に確認できたものを以下に記す。

応徳二年十月廿一日□□僧慶□
 □僧□□□□天 □大桓公
 □重□□
 藤井□清原□佛子□第一八□□什代

この銘をみると、応徳2（1085）年に僧慶□、大桓公、藤井、清原など多くの結縁によって埋納されたことがわかる。同年は、一般的に経塚が造営される時期としては比較的にやい時期にあたる。本経筒の銘文の解釈については、今後も検討する余地が残されている。

滑石製外容器（図6-2）

蓋・筒身・台座を別つくりとし組み合わせた外容器である。さらに筒身は、3部材による構成で、平面多角形をつくる。蓋は厚さ10.0cm、方形約33.0cm×34.0cmで、内径約24.0cm、深さ約2.6cmの円形の内削りを施す。筒身は、高33.5cmを測る。台座は、厚さ約10.0cmの方形で約42.5cm×約38.5cmを測り、幅2.5cm～3.5cm、深さ2.0cm～2.5cmの溝を廻らす。全体的に鑿跡が明瞭に残るが、蓋・筒身・台座のそれぞれの接触面は平滑に整えられている。

h.二丈岳穴観音経塚（糸島市二丈一貴山）（表3-i）

脊振山系の西側、二丈岳（標高711m）の山頂部付近で、平成26年から翌年にかけて、九州歴史資料館と糸島市教育委員会の合同踏査が行われた。この時に未盗掘のものを含む経塚群が発見され、その一部で発掘調査が行われている。

ここでは山頂北側付近の小丘に磐座が形成されており、小丘の頂部に少なくとも5基以上の経塚の存在が確認されている。

また、「穴観音」と呼ばれる岩屋上の集石下より褐釉陶器の専用経筒が出土している。総高36.2cmの12世紀頃に中国で製作された、いわゆる砲弾形の専用陶製経筒で、外面の装飾が非常に簡素である点が特徴としてあげられる。

これと形態の似た陶製経筒として、佐賀県唐津市鏡神社経塚や神埼市背振山経塚の出土例などがあげられるが、これら出土地はおおむね背振山系の西側に限定されており、この地域に分布する特徴的な経筒群として捉えることができる。

j.小田観音堂境内経塚（福岡市西区小田塚）（表3-j）

小田観音堂は、福岡市西区小田に所在する仏堂で、博多湾の北西部、光明山と称される標高50m程度の小高い山の頂部に位置している。

『筑前国続風土記』の「志摩郡」にある小田村の項には、「村の西の山邊に、地をほれば瓷器の鼓の如くなる物出る所あり」とある。

本経塚は、昭和の初め頃に発見されたとされる（註37）が、出土状況等の詳細については、定かな記録が残っていない。出土遺物としては、陶製経筒片が出土しており（註38）、出土遺物は九州歴史資料館に保管されている。

k.小田森経塚（福岡市西区小田森）（表3-k）

『福岡市文化財分布地図』によると、福岡市西区小田の森に経塚が所在するとされる（註39）。また、高田茂廣氏によると、昭和54(1979)年にここから経筒が出土したとされる（註40）が、出土品、出土状況等の詳細については、定かな情報が残っていない。

(2)まとめ

以上のとおり、瑠璃光寺経塚を含めて現在までに確認できる、糸島地域の経塚とその関連資料の

出土状況をまとめて概観した。

これ以外にも、平家落人伝説が残る二丈唐原地区には、「黒髪塚」という積石が残る塚が祀られており、そこから出土したとされる滑石製蔵骨器が現存している。付近にも同様な積石がみられて、経塚であった可能性もある（註41）。

糸島の経塚の分布状況をみると、旧怡土郡域からが9例、旧志摩郡域からが3例となる。いずれも山稜地に所在していた寺院(またはその跡)の近接地で出土が集中しているが、築山観音堂経塚のように、平野部に築造された古墳の頂部に埋納されたとみられる事例もある。

また、開基を清賀上人とする、いわゆる怡土郡七ヶ寺や火山瑠璃光寺などのように、渡来僧に由来のある山岳寺院と経塚の出土地との共通性も指摘できる（註42）。

これらの寺院群は、いずれも玄界灘を見渡せる眺望の利く場所に立地しており、中世の寺院造営と経塚の形成、そして玄界灘の交易活動との関連性も指摘されよう。

出土経筒等の資料をみていくと、経筒については九州型の四王寺型経筒、積上式経筒のいわゆる広域型経筒の存在が確認されるが、伝雷山経塚出土遺物のような九州の型式分類に属さない、むしろ近畿や東日本に近いような感をうける経筒も確認されており、かなりバラエティに富んでいる。

その一方で、二丈岳穴観音経塚や小田観音堂境内経塚などでは、陶製経筒が出土しており、脊振山西部域に分布圏を形成した、地域色の強い経筒群がみられるのも特徴であろう。

また、飯氏経塚出土の経筒が佐賀県唐津市の古園遺跡SX03経塚出土の経筒と同工房で製作されたことが指摘されており、これもまた、糸島を含む玄界灘沿岸域または脊振山系西部域の経塚群の地域相の表れといえるかもしれない。

本稿は、糸島地域の経塚資料の紹介に終始した形となったが、経塚造営のあり方、地域間交流のあり方など様々な課題が残っており、これらについては今後の研究の発展に期待したい。

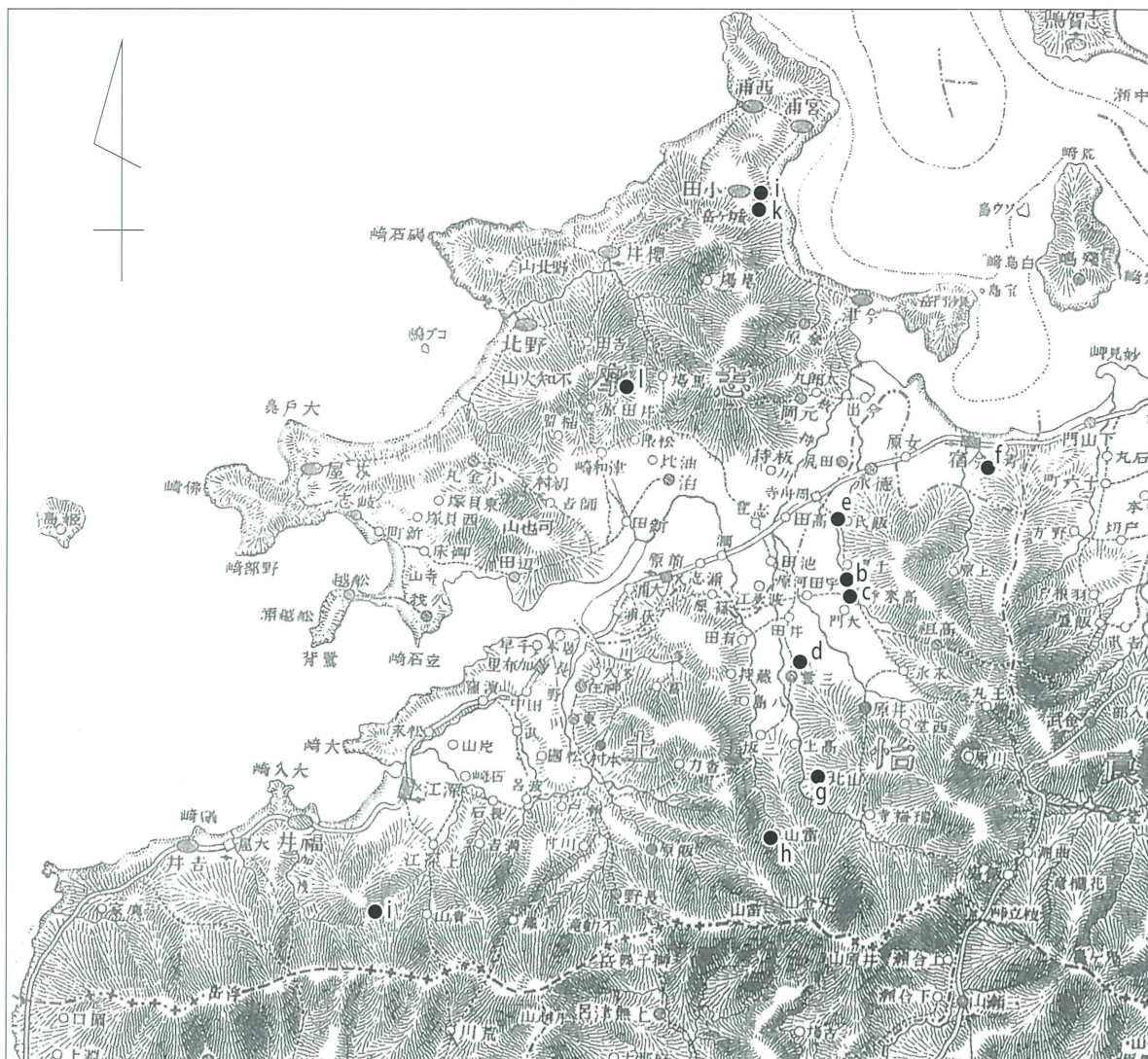


図7 糸島における経塚出土地の分布

表3 糸島の経簡一覧表

No.	記号	名称	出土地	主な出土品	備考
1	l	瑠璃光寺経塚	糸島志摩稲留字大門周辺	青銅製経筒1・陶製外容器・白磁合子(蓋1・身2)	
2	a	伝如意経塚	糸島字如意周辺	銅板製経筒1・銅製経筒 滑石製外容器1、青白磁合子1・紙本経残欠	
3	b	伝井原経塚	「福岡県糸島郡怡土村大字井原」 (現糸島市井原)	銅製経筒(横上式)1	
4	c	伝大門経塚	糸島字大門周辺	銅製経筒(横上式)1、銅鏡1、刀子1	
5	d	築山古墳経塚	糸島市	陶製経筒片、青白磁合子(蓋)1点	桃崎2012
6	e	伝飯氏経塚	福岡市西区飯氏	銅製経筒1、土製外容器2点(1組)	
7	f	伝今宿経塚	「福岡県糸島郡今宿村今宿」 (現福岡市西区今宿)	銅製経筒(横上式)1、銅鏡1、刀子1	
8	g	伝山北経塚	糸島市山北	銅製経筒(横上式)1、陶製外容器1、 滑石製石鍋1、青白磁合子1、鉄剣1、鉄刀1	
9	h	伝雷山経塚	糸島市大字雷山	銅製経筒1、滑石製外容器1組	
10	i	二丈岳磐座上経塚 二丈岳穴観音経塚	糸島市二丈一貴山 糸島市二丈一貴山	褐釉陶器片、青白磁合子片、陶製片口片、白磁片など 陶製経筒1組、土師皿など	資料表採のみ 5墓以上
11	j	伝小田観音堂境内経塚	福岡市西区小田塚	陶製経筒片1	
12	k	伝小田森経塚	福岡市西区小田森	不明	

〈註〉

- (1)岡寺良ほか編「背振山の山岳信仰の研究」
2017 九州歴史資料館
- (2)本稿Ⅲ章以降は、阿部洪太郎氏が本稿用にまとめた糸島地域の経塚資料の集成及び所見に、河合が加筆・修正し、まとめなおしたものである。Ⅳ章の遺物実測図については阿部氏が原図を作成したものに河合が加筆・修正を加え掲載した。
- (3)当該出土遺物は、平成21年2月20日付志教社第703号で遺跡発見届、同年3月26日付で埋蔵文化財保管証を関係機関へ提出している。
- (4)志摩町史編纂時調査資料から抜粋
- (5)小田富士雄1970「九州の経塚」『佛教藝術』76 毎日新聞社
- (6)前原町教育委員会編1972『前原町文化財地名表』前原町教育委員会
- (7)宮小路賀宏1999「経塚資料覚書(二)」『九州歴史資料館研究論集』24 九州歴史資料館
- (8)桃崎祐輔2012「築山観音堂」『第2回九州山岳霊場遺跡研究会「脊振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・怡土七ヶ寺—」資料集』九州山岳霊場遺跡研究会
- (9)杉山富雄1996『兜塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集 福岡市教育委員会
- (10)周船寺村誌編纂委員会1961『周船寺村誌』周船寺村役場
- (11)小松譲(編)2013『古園遺跡・千々賀遺跡・千田島Ⅱ遺跡—西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(4)—』佐賀県文化財調査報告書第200集 佐賀県教育委員会
- (12)奈良国立博物館1991『奈良国立博物館蔵品図版目録考古篇経塚遺物』奈良国立博物館
- (13)竹岡勝也1934「西油山天福寺址」『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告』9 福岡縣
- (14)小田富士雄1980「出光美術館所蔵の九州発見経筒」『出光美術館館報』32 出光美術館
- (15)註(13)に同じ
- (16)桃崎祐輔2008「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- (17)大庭康時2012「中世における福岡平野周縁の山岳寺院と博多」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告書16 久山町教育委員

会

- (18)註(5)に同じ
- (19)註(15)に同じ
- (20)服部英雄2006「博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日本人のアイデンティティ」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラーム』權歌書房
- (21)山川公見子2006「女性と埋経」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古稀記念論文集 匠出版
- (22)森井 啓次2008「墨書宋人銘の書かれた経筒」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』下 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
- 桃崎祐輔2008「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会
- (23)江藤和幸(編)2009『妙楽寺経塚』市内遺跡発掘調査報告書4 宇佐市教育委員会
- (24)林徳貞2002『百家姓』新疆青少年出版社
- (25)註(21)に同じ
- (26)狭川真一1984「第Ⅱ章13その他の遺物」『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財8 古都大宰府を守る会
- (27)平尾良光2008「材料が語る中世—鉛同位体比測定から見た経筒—」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (28)石川ゆかり・平尾良光2008「九州出土経筒の鉛同位体比が語るもの」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (29)飯沼賢司2008「銭は銅材料となるのか—古代～中世の銅生産・流通・信仰—」『経筒が語る中世の世界』別府大学文化財研究所企画シリーズ① 思文閣出版
- (30)金井徳幸2010「宋代の寺鐘—時報と銅禁をめぐって—」『立正史学』108 立正大学史学会
- (31)杉山洋1985「四王寺型経筒—村上経塚出土遺物の紹介—」『MUSEUM』413 東京国立博物館
- (32)村木二郎2003「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』21世紀を拓く考古学① ミネルヴァ書房
- (33)佐賀県教育庁社会教育課編1970『佐賀県の経

- 筒』佐賀県教育委員会
- (34) 註(32)に同じ
- (35) 小田富士雄1970「九州の経塚」『佛教藝術』
76 毎日新聞社
小田富士雄・宮小路賀宏1970『武蔵寺経塚』
武蔵寺史編纂会
- (36) 註(5)に同じ
- (37) 高田茂廣1980「北崎の歴史」『北崎小学校百
年誌』福岡市立北崎小学校
- (38) 井形進2012「万歳山光明寺と平安時代後期の
仏像群」『第2回九州山岳霊場遺跡研究会「脊
振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・怡土
七ヶ寺—」資料集』九州山岳霊場遺跡研究会
- (39) 福岡市教育委員会編1995『福岡市文化財分布
地図(西部Ⅱ)』福岡市教育委員会
- (40) 註(37)に同じ
- (41) 岡部裕俊・古川秀幸2012『糸島平家物語—糸
島地方における武士の出現と平家落人伝説—』
糸島の歴史解説図録1 糸島市立伊都国歴史
博物館
- (42) 吉田扶希子2003「雷山千如寺に関する一考察」
『西南学院大学大学院文学研究論集』22 西
南学院大学大学院